

不幸の蔭の幸福

東京 矢野 一郎

学士会報に出したこの感想文を、点字にして盲人に読ませたいというお申し出がありました。点字を讀む方の大部分は生れながら、或いは若年で眼の世界と絶縁された方々で、そういう方が「しあわせ」を求めるためには、ヘレン・ケラー女史のように専念、心の世界を開拓して立派に仕上げることが最も善い生き方です。

私の一文は、晩年近くまで社会で活動され、見た目の、やりたいことを充分やって来られた方が、晩年眼を患って、一度に人生が暗くなったように悲しみ歎く方が案外に多いので、私自身の考え方を申し上げて見たまのでことでもあります。

老境に入れば、大抵身体はどこかに故障が出て、そのため多少の不自由は已むを得ません。私の場合はそれが眼に來ただけのことです。

しかし、世の中には眼を使わなくても出来ることは山のようにありますし、楽しむ材料も過去に豊富にありますから、歎くのは行き過ぎではないかと思つて、そういう、いわゆる功成り名遂げた方の悲しまれることを慰めるつもりで書いたものであることを、予めご承知の上ご笑読下さい。

界が大きく発展して豊かになった。そして他人の心の中もよく見えるようになって來た。大体、人間の脳は視覚によって一番左右されることだから、眼の見える人は日常眼前のことにとらわれて忙しく暮している。しかし一旦眼が見えなくなると、脳は思索的になり、追憶的になってゆくという事に気がついた。今まで全く忘れていた過去が忽然として浮んで來る。美しい、楽しい思い出がはつきりと現われてくる。

五十数年も前に父と欧米を旅行した当時に流行していた音楽が聞えて來ると、あたりの情景が真新しい景色の様に浮んでくる。また何十年も忘れていた昔の歌の文句がすらすらと出て來て、我ながら吃驚することもある。

前が見えない代りに、私の心は過去の記憶の世界を見始めていることに気がついた。そこには美しいもの、楽しいものは山の様にある。そしてその中から、今でも私だけしか知らない大事なことを発見することも多い。それはテープに吹込んで、孫子や会社の若い人たちのために残しておく。父のことも語り、母のことも語つてテープに残しておける。材料は無限にあるから、死ぬまで困らない。

も一つ好いことがある。今まで逃げる事が出来なかつた公職から放免されたことだ。会長とか理事長とかいうような責任を負わさ

私は還暦の頃から視力が衰えはじめて、六十五歳頃になって矢継早に網膜炎や網膜出血、緑内障に見舞われ、左眼だけでも六、七回の手術をうけ、白内障の手術を最後に漸く常人の三割位の視力を残すことができた。その後数年を経て、今度は右眼に緑内障が起り、こちらもまた数回手術を経て白内障の始末までやつたけれど、不幸にして右眼は視力は零である。左が少し見えるだけだが、矢張り疲れるから用のない時には眼を閉じていることが多い。

よく十数回も手術室に入ったね、などと言われるけれど、やり出したら徹底的にやり遂げなければ意義はないから、別に我慢してやつて來たという程のものではないが、結果に於て、今のところ半分以上のめくらである。元來私の眼は好い方だった。両親も眼は好い。それなのに何故そんなに眼を患うことになつたか。医師の話によれば、結局壮年期にひどく神経を酷使したことが、この思いがけない不幸を招いたのだということだ。

そう言えば私の生涯の中で、四十五、六歳から六十歳位までの十五、六年間は、健康に任せて不眠不休で働いた。剣道で鍛えていたから体力には自信があつたが、日夜神経を勞することばかりだった。戦争末期の社業の難局、敗戦による会社の破局、併せて本社社屋

れていたものは、殆んど辞任を許してくれた。そして、名誉会長、名誉顧問、名誉会員、名誉町民などと皆責任の軽い名誉職に変えてくれた。おかげで適当に悠々自適も出来る身分になれた。

又、数字と活字とは縁が切れて、ゆつたりとした心持ちになって來た。この二つは現代人を日夜苦しませている二大麻薬だから、なるべく縁のない方が楽しい。眼あきの人たちは気の毒なものだ、と塙保己一を氣取つて見たくなる時もある。

若い人が眼を患うことは大変な不幸だ。まだこれから見たいものが無限にある時に視力を失ふことは致命的な打撃であろう。また、画を描く人にとつても、大きな痛手であろう。しかし私は幸いなことに、見たいものは大抵見たし、内地も海外もたんのうするぐらい旅行もした。今更どこに旅行したいなどとは思わない。いっぱいある過去の美しい思い出を呼び出して楽しんでゆける。不思議なことにも過去のものは皆美しい。剣道も道場に立たなくても心剣の修業には差支えない。

音楽は生來大好きだから、眼を閉じると、色々な音楽が流れてくる。これも亦楽しい。時には自分なりのメロディーが現われてくるから、作曲もできる。娘にでも採譜して貰え

の接收などと、心痛に追いまくられて、随分ひどい無理を重ねていた。

殊に連合軍相手の交渉などでは、秘書もタイピストも使うことはできず、全く自分独りで、あちらの幹部に体当りをして、理解と援助を求め通した。お蔭で第一生命も消えずに済んだ。その後は生保協会の会長を八年間もやらされて、業界の再建の見通しが立つまで苦勞した。六十歳になって、やっとホットした時、急に疲れを感じ始めたので、十三年に亘る第一生命の社長と、八年続けた協会長の重任から退かせて貰った。

思えば確かに神経を酷使し続けたのだが、終始夢中で氣付かなかつたのだからその罰として視神経がダウンしてしまい、半めくらになつたのも仕方がない。しかし、それで第一生命と生保業界を護ることにはお役に立つたのだとすれば、言らになる位の犠牲は何でもない。誠に男子の本懐であると、自分ではそう思っているから、残念とも思わないし、悲觀もしない。だから私の心境は、他人が想像するよりは遙かに明るい。私の心の部屋の中にはいつも明るくて、楽しい。

眼を患つてから随分いろいろなことを体験もし発見もした。人間の生理的構造も一段とよくわかつて來た。しかしそれよりも心の世

ば矢野一郎作詞作曲全集を生むことも満更夢ではない。勿論、こんなもので世間に迷惑をかける気はないが、晩年の私の生活は、こうして楽しさで充実している。

もう一つ、他人との人間関係が變つて來たことを感じる。今までは眼と眼のつきあいとお互に姿を見、顔を見合せての交際だったが、近頃は心と心とのつきあいに變つて來たことを感じている。だから、電話一本、はがき一枚の言葉にも従来感じなかつた心の温かみを感じ得るような氣がする。おかげで姿を通じての親しさは、心を通じての親しさに變つて來た。これもまた眼が見えないことが与えてくれるしあわせの一つだと思ふ。

前にも言ったことだが、これから未來に生きようという若い人が眼を失ふことは大変な不幸である。しかし私などのように、今から先の世の中には用事のない老人、しかも今までに充分見たいものを見、やりたいことをやって來た者にとつては、この辺で眼が悪くなることも知れない。大体我々はもう未來に口を入れるべき年齢ではない。むしろ、過去の貴重な体験を伝えるべき立場であろう。神様にそんなお考えもあるのではなからうかなどと思つたりしてほほえむこともある。(口述筆記)

(学士会報より転載・保険一生命)